小論文

法文学部（人文学科　多元地域文化コース）

注意事項

一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。

二、この冊子は、表紙を除き九ページである。

三、「解答始め」の合図があったら、まず、黒板等に掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。

四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。

五、解答用紙は切り離さないこと。

次の文章を読んで設問に答えなさい。

一

「恋愛」とは何か。「恋愛」とは、男と女がたがいに愛しあうことである、とか、その他いろいろの定義、説明があるであろうが、私はここで、「恋愛」とは舶来の観念である、ということを語りたい。そういう側面から「恋愛」について考えてみる必要があると思うのである。

なぜか。「恋愛」もまた、「美」や「近代」などと同じように翻訳語だからである。この翻訳語「恋愛」によって、私たちはかつて、一世紀ほど前に、「恋愛」というものを知った。つまり、それまでの日本には、「恋愛」というものはなかったのである。

しかし、男と女というものはあり、たがいに恋しあうということはあったではないか。万葉の歌にも、それは多く語られている。そういう反論が当然予想されよう。その通りであって、それはかつて私たちの国では、「恋」とか「愛」とか、あるいは「情」とか「色」とかいったことばで語られたのである。が、「恋愛」ではなかった。

一八九〇年十月、『女学雑誌』で、この雑誌を主宰していた巌本善治は、翻訳小説『谷間の姫百合』の批評を書き、そこでこう述べている。

訳本を評するには文章の外か言ふべき所あらず。更に一事の感服する所ろ及び承知しがたき所ろを挙れば、訳者がラーブ（恋愛）の情を最とも清く正しく訳出し、此の不潔の連感に富める日本通俗の文字を、甚はだ潔ぎよく使用せられたるの手ぎはにあり。例せば、

私の命は其恋で今まで持てゝ居ります。恋は私の命ちで私に取りても此外には何の楽も願もありませぬ。……あなたは実に男一人の腸を寸々にしました。一生を形なしにしました。

の如き、英語にては"You have ruined my life"など云ふ極めて適当の文字あれど、日本の男子が女性に恋愛するはホンノ皮肉の外にて、深く魂（ソウル）より愛するなどの事なく、随つてかゝる文字を最も厳粛に使用したる遺伝少なし。

ここで、「ラーブ（恋愛）」ということばが登場しているのだが、筆者は、これを、「恋」などのような「不潔の連感に富める日本通俗の文字」とは違う、と考えている。loveと「日本通俗」の「恋」とは違う。そこで、そのloveに相当する新しいことばを造り出す必要があった。それが「恋愛」ということばだったわけである。

この「恋愛」をもとにして考えてみると、「恋愛」は、「不潔の連感に富める」「恋」などと違って、上等である。価値が高い、とされている。その違いは、「恋愛」の方が「清く正しく」「深く魂（ソウル）より愛する」ような意味を持っているからである。

そして、このlove＝恋愛ということばの意味することがらは、西欧にはもちろんあったわけだが、日本にはなかった。あるいはほとんどなかった、と考えられている。「日本の男子が女性に恋愛するはホンノ皮肉の外にて、深く魂（ソウル）より愛するなどの事なく」、また、「かゝる文字を最も厳粛に使用したる遺伝少なし」と言うのである。

つまり、「恋愛」は価値が高い、が、このことばの意味することがらは日本にはない、と当時の先進的知識人厳本善治は考えていたわけである。

二

厳本善治のこの「恋愛」観は、かなりもっともなところがあった、と私は考える。「恋愛」ということばの伝える意味内容が日本にはなかったということ、これは、「恋愛」ということばが当時の新造語であって、それ以前にはなかったのだから、それに対応する意味もなかったのは当然である。このことは、「社会」ということばを知る以前に「社会」の意味はなく、「美」を知る以前に「美」はなかったのと同様である。

それから、「恋愛」は価値が高く、日本に従来あった「恋」などは、これに対して価値が低いということ、冷静に考えれば、こういう考え方は、もちろんあやまりである。が、これは、先進国の事物が、翻訳語ということばを介して理解されるとき、私たちがいつでも陥りがちな思考法なのである。

しかし、「恋愛」と「恋」とが、価値が高い、低いということで違うのではなく、とにかく違っているということ、これはもっとも

であろうと思う。そしてその違いについては、厳本がここで言うように、「恋愛」とは「深く魂（ソウル）より愛する」ことだ、という考えには、かなりうなずける所があるように思うのである。

英語で、loveに大変近いことばに、romanceがある。romanceとは恋物語のことであり、その源は、中世騎士物語である。『アーサー王と円卓の騎士』のような物語がその典型であって、たとえば一人の騎士がお城の近くを通りかかると、彼方のバルコニーに美しい女性の姿が見える。女性がスカーフを投げる。騎士はそれを受け取ると、冒険の旅に出る。旅の途中の森の中で、巨漢と出会って決闘となる。騎士は巨漢を打負かす。だが殺さない。降参させた上で、あのお城の女性のもとへおもむいて私のことを伝えてこい、と命ずるような筋のパターンである。

はじめに美しい女性がいる。遠くの方から現われる。男は、直ちにそれに近づいていこうとしないで、かえって遠ざかる。しかも生命を賭けた危険の方に向っていく。男は、冒険の果てに、やがてその美しい存在のもとへ帰ってくるのだが、そのloveの始まりの形にとくに注目したい。このような物語の背景には、マリア崇拝や、十字軍の遠征がある。つまりキリスト教が根本にある。

「永遠の女性」とは、ゲーテが『ファウスト』で語っているように、遠い彼方から男を導く存在である。導く存在は、身近ではありえない。遠い彼方にいるから、男はそれにあこがれるわけだが、たとえ身近にあっても、あえてそれを遠い彼方に置こうとする。男は、恋する女性を、もちろん身近に引きつけたいと願う。が、それだけでは西欧の「恋愛」の型は生まれなかった。騎士はお姫様の住む城から冒険に旅立つのであり、こうして遠い彼方の女性というものをあえてつくりだすのである。やがて肉体の恋はやってくるとしても、それとは別に、遠い彼方にあこがれる「魂（ソウル）」の恋がある。

ところで、私たちの国には、こういうパターンの恋物語は、まずなかった。『万葉集』の恋歌は、ほとんどすべて、二人がいったん結ばれて後の悲しみや喜びを歌っている。『万葉集』の恋する男にとって、恋する人は、遠い彼方ではない。肉体を離れた魂だけの存在ではない。『万葉集』の中にも、一度会っただけの人にあこがれる、というような歌もまれにはあるが、これにしてもよく注意して読むと、一度会った、とは、一度結ばれた、という意味であるらしいことが多い。

厳本の理解した、loveとは「深く魂（ソウル）より愛する」ことだ、という考えについて、私はこのような事情を考えざるをえないのである。loveとは、決して「魂」だけのできごとではない。しかし、魂と肉体とを区別して理解しようとする考え方、ものの見方がそこにはある。私たちの伝統的な「恋」や「愛」が、心と肉体とを常に切離さず、一つに扱ってきたのと対照的である。したがって、loveの解釈として、「魂」だけをとくに強調する「恋愛」観も、当然あっておかしくなかった、と考えられるのである。

三

「恋愛」ということばは、いつごろから使われるようになったのだろうか。ここで、loveや、これに相当する西欧語の翻訳の歴史をふり返ってみよう。

日本語の辞書ではないが、幕末から明治初期の人々によく使われた各種の「英華字典」では、古くから「恋愛」ということばが出てくる。ただし、動詞のloveの訳語で、名詞のloveの方ではない。メドゥーストの『英華字典』では、to loveの訳語が、「愛、好」で始まって、「愛惜」「恋愛」などがある。名詞のloveの項では、「愛情、寵、仁」などだが、「恋愛」はない。ロブシャイドの『英華字典』でも、だいたい同じである。

日本語の辞書では、『和蘭字彙』が、liefdeの訳語に、「寵愛又愛敬」「仁」とある。『仏語明要』が、amourの訳語を、「恋○愛○恋神」としている。『英和対訳袖珍辞書』では、loveが、「愛、恋、財宝」である。日本語の辞書に「恋愛」が現われるのは、仏学塾の『仏和辞林』がたぶんもっとも早く、一八八七年版で、amourの訳語が、「恋愛。鍾愛。好愛。愛。愛セラル、所ノ者」となっている。

「恋愛」という翻訳語の実際の用例は、前記の厳本善治以前では、非常に少ない。おそらく最初の用例は、一八七〇―七一年に出た中村正直の翻訳、『西国立志編』における例であったろう。そこで、

李嘗（リイかつ）テ村中ノ少女ヲ見テ、深ク恋愛シ、

と使われている。原文では、ここのところは、

to have fallen deeply in love with a young lady of the village.

となっている。中村の訳文には「英華字典」の影響が大きいので、これもそうであろう。「恋愛シ」という言い方では、この「恋愛」の部分は、サ変動詞の語幹である。この点も、「英華字典」で「恋愛」が動詞として扱われていたことと似ている。

巌本善治のあの「恋愛」の紹介も、系譜をたどれば「英華字典」の訳語を受け継いでいた、と考えられる。が、巌本のこの「恋愛」論は、私たちの「恋愛」史上、画期的な出来事であった、と思うのである。

第一に、巌本はあそこで、「恋愛」を真正面から肯定した。それは、とりわけ、あの前後の時代的背景の中で、画期的なのである。

「恋愛」は、とくに小説の中心テーマであるが、幕末から明治初期の頃、西欧の書物がいろいろと翻訳され、紹介された中で、小説は少なかった。あったとしても、『ロビンソン・クルーソー』のような冒険小説、あるいは政治小説などがおもであった。要するに、男の時代だったのである。国造りの仕事に忙しい男たちにとって、「小説」や「恋愛」は、二の次、三の次だった。『西国立志編』におけるあの「恋愛」にしても、これはこの書物でただ一ヵ所現われている「恋愛」だが、少年李（リイ）は、「恋愛」したものの、女は靴下を編む仕事に忙しくて相手にしてくれない。そこで、それなら靴下を機械で編む自動織機を発明してやろうと思い立った、というのである。

巌本善治の『女学雑誌』は、この男の時代の中で、精一杯、一つの抵抗の拠点をつくっていたのである。「恋愛」は、あの紹介の頃以後、巌本の指導と支持で、『女学雑誌』の一つの中心テーマとなっていく。「恋愛」論の投書がしきりにとりあげられ、北村透谷が、それを引きつぐ。そしてやがて、日本におけるロマン主義の時代を花開かせたのである。

ところで、問題は、「恋愛」という翻訳語、つまりことばの問題である。巌本から透谷を経て、日本の一時期の文芸へと受け継がれていく「恋愛」の思想を、その特徴を、時代とか歴史という視点から眺めることはもちろん重要である。が、それとは一応別に、翻訳語ということばの視点からとらえることができる。それを考察してみたい。

四

巌本のあの文章が出た翌月の一八九〇年十一月、『女学雑誌』に、愛山生と名乗るおそらく若い筆者の「恋愛の哲学」と題する文章が載っている。熱烈な調子で論じ続けたその結びに、

嗚呼人の心霊と身体とに革命を行ふ恋愛よ。趣味想像の新しき境域を開拓する恋愛よ。英雄を作り豪傑を作る恋愛よ。家を結び国を固むる恋愛よ。余は大なる詩人出でゝ爾を書き過りし幾多の小家族を瞠若たらしめんことを望む。

と言うのである。肩ひじを張った生硬な文章で、「英雄を作り豪傑を作る恋愛よ。家を結び国を固むる恋愛よ」と叫んでいるのは、いかにも唐突で、滑稽でもあろう。論理はもちろん飛躍している。いったいこの人は「恋愛」を何のことと思っていたのだろうか。

いや、この人に限らなかった。おそらく当時の日本人が、初めて、いわば堂々として肯定できるような「恋愛」を教えられたのである。それはまず、ことばとしてやってきた。とにかく大事なもの、立派なことである。その意味・内容については、まだよく分らない。が、とにかく大事である。

「恋愛」の流行は、まず「恋愛」ということばの流行であった。そして、このことばによって支持され、勇気づけられた若い人々の間に、やがて「恋愛」という行為の流行として広まっていった。「恋愛」を流行させた人々は、知識人やその子弟に多く、とくにプロテスタント系クリスチャンや、その周辺の人が多い。知識人に多いということは、翻訳語一般について言えることであるが、クリスチャンへの影響ということは、「恋愛」が、巌本善治たちの解釈で、その精神的側面が強調されて理解されていたことにもよるであろう。

「恋愛」の流行は、他方、これに対する反感もひき起した。これも、一般に新しい翻訳語をめぐって起きる反応と共通である。「恋愛」は堂々と口にされ、行なわれている。「色」や「恋」ならば、日常ふつうのことではあったが、人目を避けるべきものだったのである。当然、保守的な人々から反撥されたが、そればかりでなく、維新以来、新しい時代を導いてきたエリートの主流たちも、この「恋愛」流行を、不愉快なこととして迎えた。

一八九一年七月、当時の論壇の代表誌であった『国民之友』は、その中心人物である徳富蘇峰の「非恋愛」と題する論説を載せている。「恋愛何物ぞ、男女交際何物ぞ、自由結婚何物ぞ」と「恋愛」を弾劾し、「恋愛」にうつつを抜かしている青年男女について、世を憂えたのである。ただちにその翌月、『女学雑誌』上で、巌本善治は、「非恋愛を非とす」と題する論文を書き、「恋愛は神聖なるもの也」と反論した。

このようなやりとりのうちに、その背景として、当時の若い知識人男女における「恋愛」熱の高まりをうかがうことができよう。

五

北村透谷は、巌本善治に認められて、『女学雑誌』へしきりに寄稿した。文学史上に残るほどの文章も、ここで発表していたのであった。

一八九〇年一月、透谷の論壇への出世作である「当世文学の潮模様」で、「愛恋」ということばをめぐって論じているところを見てみよう。

いでや彼等に吾が大知嚢より人情の道を教へん、愛恋の哲理を授ん、希臘の古哲学と欧米の新理想とを筆に任かせて示しやらん。公等の理想斯の如くにはあらずや。……宇宙の大観は愛恋より大なる者なし、是を極むるは小説家の本領なる可きも、余は未だ小説家の本領 悉くこゝに止まるを知らず。

ここで使われている「愛恋」には、とくに翻訳語であるようなようすはない。「愛恋」という用語は、漢籍にも古く用例がある。男女間の愛情を指すことばである。ここで使われている「愛恋」ということばには、前に引用した文章におけるような、翻訳語に固有の文章上の「効果」は見受けられない。

そして、一八九二年二月、北村透谷は、「厭世詩家と女性」と題する文章を、『女学雑誌』に書いた。その冒頭に、

恋愛は人世の秘鑰（注・秘密の鍵）なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ。

と述べたのである。木下尚江は、これについて、「この一句はまさに大砲をぶちこまれた様なものであつた。この様に真剣に恋愛

に打込んだ言葉は我国最初のものと思ふ」と、後に語っている。この文章はまた、後に『文学界』に集まる島崎藤村などの詩人たちにも激しい影響を与え、文学史上、明治ロマン主義の一時期を画する重要な論文として知られている。

二年前、やはり透谷が、同じ雑誌に発表した前掲の「当世文学の潮模様」とは、論旨がまるで反対なほどに違っているように見える。あの時は、「宇宙の大観は愛恋より大なる者なし、是を極むるは小説家の本領なる可きも、余は未だ小説家の本領悉くこゝに止まるを知らず」と、「愛恋」の限界の指摘に重点があったのだが、今や、「恋愛ありて後人世あり」と言うのである。

いや、私の見方によれば、これは違ってはいない。前の言は「愛恋」であったが、これは「恋愛」だからである。翻訳語「恋愛」だからである。

透谷がここで語っていたのは、loveとしての「恋愛」であった。文中、ギヨエテ、バイロン、シエレイ、ミルトン、カーライル、エマルソン、スウイフト等々、西欧の詩人・文人の「恋愛」はしきりに論じられているが、東洋、日本の例では、「釈氏」(釈迦)「露伴子」(幸田露伴)が女性を軽蔑し、結局「恋愛」を否定したということが僅かに語られているだけである。若くして女学校で英語を教え、横文字に堪能であった透谷にとって、「恋愛」ということばのすぐ向うの方には、loveということばがあった。loveによって語られる絢爛たる世界が見えていたであろう。

しかし、透谷の「恋愛」は、やはりloveと同じではなかった、と私は考える。同じ「厭世詩家と女性」で、透谷は言う。

> 春心の勃発すると同時に恋愛を生ずると言ふは古来似非小説家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮少したる毒弊なり、恋愛豈単純なる思慕ならんや、想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城となるは即ち恋愛なり。

これはこの論文の中心主題を語っているところである。透谷のこの「恋愛」論における、「恋愛」の定義とも言うべき文句である。しかし、思うに、「春心の勃発すると同時に恋愛を生ずると言ふは古来似非小説家の人生を卑しみて」ではなくて、これもやはりloveなのであろう。「春心の」「恋愛」を描いた西欧の多くの名作を否定はできない。「恋愛豈単純なる思慕ならんや」とは言うが、loveは「単純なる思慕」をも含んでいる。透谷はこれを切り捨て、「想世界の」「牙城」としてのloveのみを「恋愛」である、とした。

言い換えるなら、透谷は、「恋愛」の意味を、「想世界の」「牙城」にしか見出すことができなかったのである。これは、私たちの国における翻訳語の特徴的な性格を暗示している。

透谷はこの後、編集者、巌本善治や、若い読者たちに支持されつつ、次々とこの雑誌に文章を発表していった。主題はさまざまであるが、「恋愛」を論じたものが多い。その「恋愛」は、しだいに観念として純化されていく。「歌念仏を詠みて」という一文では、「抑も恋愛は凡ての愛情の初めなり」と言って、「親子」「朋友」「上天」への愛も、「恋愛」によって根拠づけようとするのである。これは、loveからさえも遠い観念である。翻訳語「恋愛」は、一方で伝来の日本語と異なっているとともに、他方、原語のloveとも、その意味や、機能の上で同じではないのである。

こうして観念として純化された「恋愛」は、当然、日本の伝統や現実のうちに、その実現をとらえることが困難になっていく。したがって、「恋愛」は、現実に生きている意味ではなく、日本の現実を裁く規範になっていく。これは、私たちの国の翻訳語の宿命である。そしてこの宿命が、透谷じしんの短い生涯や、さらに、彼の「恋愛」観に感動した人々、明治ロマン主義の詩人たちの、熱烈でかつ短命な行く末までも、おそらく動かしていたであろう。

〔出典〕『翻訳語成立事情』柳父　章著、岩波書店、一九八二年

※出題にあたって原文の一部を改変し、小見出しを漢数字に置き換え、常用漢字表を参照して一部にルビを加えた。

設問一　本文の内容を四〇〇字以内で要約しなさい。ただし、句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含む。

設問二　著者の主張を踏まえつつ、異文化の受容についてあなたの考えを六〇〇字程度で述べなさい。ただし、句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含む。（解答欄は七〇〇字）